

今も市民の憩いの場として愛されている 花見の名所に歴史あり



タヌキの石像

高崎公園はレトロでいっぱい

●樹齢400年のハクモクレンは 高崎のシンボル

高崎市役所の南、烏川と観音山を望む高崎公園は、現在も春は桜の名所としてにぎわい、美しい樹木や季節の花で彩られ、年間を通じて市民の憩いの場となっている。

この場所は、江戸時代にはまだ寺があったが、明治以降は高崎15連隊の作業場となり、隣には陸軍病院があった。市が公園として整えたのは、明治時代の終わり頃からだ。

公園内の巨木ハクモクレン（県天然記念物）は、元和5年（1619）に高崎城主になった安藤重信が植えたというので樹齢400年になる。春には美しい花を咲かせ、傍らには歌人・吉野秀雄（1902～1967）が詠んだ「白木蓮の花の千万青空に白さ刻みてしづもりにけり」の歌碑が建立されている。高崎市役所内には、このハクモクレンを平山郁夫画伯が描

いた陶壁画「高崎の春」が飾られている。

当時、鞆町に住んでいた俳聖・村上鬼城（1865～1938）は高崎公園の散歩を好み、いつも出かけてきていたという。

●県内初の水道が完成し大噴水も

高崎公園中央の池の噴水は、明治43年（1910）に高崎に初めて水道が敷設されたのを記念して作られた。当時、吹き上がる水の高さは公園に植えられた木よりも高く3mを越えていた。完成時は見物人が押し寄せて大歓声を上げ、噴水は少し離れた柳川町あたりからも見えたという。水道敷設は全国で20番目、県内では初めてとなり、公園の噴水は近代化の象徴でもあった。当時の高崎公園は崖上と崖下に分かれ、そばを流れる烏川でボート遊びも楽しめた。

●釣り人をだましたお化けタヌキ騒動

噴水の横に大きなタヌキの石像が建てられている。笠をかぶり、魚籠を抱え、なんとも憎めない表情をしている。美しい烏川を讚え、豊漁を祈願す

る水神講の記念で、台座には大正十二年六月高崎遊魚天狗と刻まれている。

当時、公園には烏川に降りる薄暗い小道があり、釣り人がしばしば通っていた。釣った魚がいつのまにか盗まれていたとか、陸軍病院の衛兵が怪しい女にたづらかされたとか、不思議な事件が相次いだそうだ。これはタヌキのしわざに違いないと、釣り人たちがタヌキの石像を建立したという。当時の高崎市助役が釣り好きだったようで、タヌキ像の発起人となっているから、化けタヌキは本当にいたのかもしれない。

高崎公園は集会などにも使われ、戦時下は畑として耕されたという記録もある。今も残る野外ステージでは、戦後、コンサートがしばしば行われ、市民を楽しませた。国道17号が通されるため、公園は削られてしまったが、今も変わらず市民に愛され続けている。高崎で唯一、動物舎があり、サルやクジャクなどが飼育されている。昔、クマ舎があったあたりから烏川に渡る歩道橋の工事が既に行われており、今年の秋には完成するそうだ。